



2019年度通常枠
実行団体向け

実行団体向け精算の手引き

2022年12月13日
(Version 1.1)

目次

1. 資金管理の基本	P.2
1. 指定口座による資金管理	P.2
2. 指定口座からの支払い	P.3
3. 入出金の記録と支払証拠書類	P.3
4. 予算執行の柔軟性	P.4
2. 資金管理に関する業務	P.5
1. 業務概要	P.5
2. 精算手続き	P.5
3. 助成金の支払い	P.11
4. 区分経理	P.12
3. 対象経費	P.13
4. コンソーシアム	P.14
1. コンソーシアムにかかる用語	P.14
2. コンソーシアムモデル	P.14
3. 「コンソーシアム構成団体」の業務	P.14
4. 構成団体の支払証拠書類	P.16
参考. 経費精算報告書の記載方法	P.17

1. 資金管理の基本

実行団体（以下「各団体」という）は、助成対象事業（資金提供契約第1条で定義される本事業のこと。以下「本事業」という）における資金管理について、「休眠預金等交付金に係る資金の活用に関する基本方針」、資金提供契約（以下「契約」という）および精算の手引きを遵守してください。

本事業の精算における基本的な事項は以下のとおりです。

- ・ 事業年度：本事業の事業年度は、契約別紙2記載のとおり毎年4月1日から翌年3月31日までとします。
- ・ 会計科目：原則、各団体において財務諸表作成目的で通常用いている会計科目を使用します。
- ・ 精算対象：本事業の精算は、実費かつ消費税込みの額で行います。

※税務に関する事項は、所管税務署や税理士にご相談ください。



本事業の資金管理は精算の手引きを遵守いただきますが、各団体の経理処理は自団体の経理規程に則るという原則に変わりはありません。なお、各団体は契約の定めに則り規程類の整備を行ってください。

1-1. 指定口座による資金管理

指定口座とは、契約に基づく助成金および各団体が自ら確保する自己資金・民間資金を合わせた総事業費（契約第1条に定義される「本総事業費」のこと。以下同じ）を管理するための金融機関口座であり、実行団体の指定口座は資金分配団体が指定します。各団体は指定口座において本事業の総事業費以外の管理を行ってはならず、また指定口座以外の金融機関口座において総事業費を管理してはいけません。指定口座は、原則として採択事業毎に新たに開設します。なお、各団体が本事業の実施により得た利益は、総事業費の自己資金として指定口座で管理します。



本事業の財源である休眠預金等は国民の資産であることおよび助成金が概算払いであることを踏まえ、指定口座で資金管理を行う仕組みとなっています。指定口座に入金されるのは本事業に使われるべき資金になりますので、他事業に使うための資金移動は絶対に行わないでください。

※ 指定口座に入金できない自己資金・民間資金がある場合

金融機関からの融資や他財団からの助成を受ける等の理由で本事業の指定口座に入金できない自己資金・民間資金がある場合、資金計画から当該資金に係る費用（例：建物取得費用）を除外したうえで、本事業の指定口座とは別口座で管理できます。このような場合は、原則として助成期間開始前に実行団体は資金分配団体に相談し、必ず承諾を得たうえで資金の管理を行ってください。

本事業が終了し、事業完了時の精算手続きを全て終えた後の指定口座の取り扱いは以下のとおりです。

- ・ 指定口座の残高が0円かつ以降も入金予定がない場合、解約や他事業への利用を可能とします。
- ・ 指定口座に自己資金・民間資金が残っている場合、契約に則り、当該資金は本事業または事業完了時監査において承諾された事業の実施のためにのみ使用します。当該資金は原則として指定口座で管理しますが、事業完了時監査において書面による承諾を得た場合は、指定口座から別口座への資金移動および指定口座の解約を可能とします。実行団体は資金分配団体からの承諾が必要です。

1-2. 指定口座からの支払い

指定口座からの支払いは、原則として支払先口座への振込、引き落としまたは指定口座からのクレジットカード払いとします。

■ 原則に当てはまらない支払いへの対応

<各団体の法人口座を経由した支払い>

本事業と他事業との按分経費（家賃等）および他事業分と一緒にして支払う必要が生じる経費（社会保険料等）について、本事業分を含めて各団体の法人口座から支払うことを認めます。処理としては、各団体の法人口座から支払先口座への支払い後に、指定口座から法人口座に本事業の負担分を振り込んでください。同月内に処理することを前提としますが、社会保険料等は、資金分配団体が合理的に説明できる方法であれば異なる対応でも構いません。

<現金での支払い>

やむを得ず現金での支払いが必要な場合は指定口座から現金を引き出すことができますが、月間上限額（表1）を超える場合は予め承認を得てください。この場合、実行団体は資金分配団体の承認後に現金を引き出すことができます。

現金の残金は、原則として速やかに指定口座に戻入します。少なくとも精算報告を行う毎年度末および事業完了の前には指定口座に戻し入れてください。

表1 現金引き出しの月間上限額

団体	当該年度の助成金総額	当該年度の月間上限額
実行団体	0円～100万円以内	1万円
	100万円超～300万円以内	3万円
	300万円超～500万円以内	5万円
	500万円超～700万円以内	7万円
	700万円超～	10万円

1-3. 入出金の記録と支払証拠書類

指定口座の入出金の内容は、本事業の経費精算報告書にキャッシュベース（支払いベース）で記録します。原則として指定口座の入出金があった日付で記録してください。

なお、適用の対象は本事業の経費精算報告書であり、各団体の会計基準および決算書類には影響しません。指定口座から支払った経費を助成対象とするには、領収書等の支払証拠書類の取得が必要です。



なぜキャッシュベースなの？

発生主義を適用すると固定資産取得時に減価償却費として計上することになり、支払額の一部が助成の対象とならない状況が起こります。そのため本事業ではキャッシュベースでの記録をお願いしています。

1-4. 予算執行の柔軟性

実際に事業を実施してみると、資金計画とは異なる使い方が必要となる場合があります。休眠預金事業では、創意工夫の余地となるように資金の使い方に柔軟性を持たせています。以下の条件下（表2）において、資金計画上の予算が不足している会計科目の支出増加分を、予算が余る会計科目の支出減少分で補うこと（科目間流用）ができます。この科目間流用に関する規定は、年度毎ではなく助成期間合計で適用されます。

表2：科目間流用の条件

<実行団体>

できること	各目的区分の範囲内であれば、異なる会計科目に資金を流用することができます。 ただし、以下に該当する場合は資金計画の変更が必要です。 <ul style="list-style-type: none">・人件費への流用・流用元科目の20%を超えた金額の他科目への流用・資金計画にない会計科目への流用
できないこと	目的区分を跨いで資金を流用すること ^{*1}

*1：やむを得ない事情がある場合の事業費内の流用は、管理的経費の上限規定（事業費の助成額に対して15%以下）の範囲内で認めることができます。実行団体が流用する場合は資金分配団体の承認を要します。いずれの場合も資金計画の変更が必要です。

目的区分とは？

本事業の経費は、使途に応じて分類されます（表3）。精算の手引きでは、この分類を目的区分といいます。

表3：経費の分類

団体	目的区分		契約における記載
実行団体	事業費	直接事業費	本事業を実施するために直接必要な経費
		管理的経費	本事業を実施するために間接的に必要な経費 人件費、設備備品費等に係る経費及び事務所の家賃等の一般的な経費で、本事業を実施するために費やした部分を特定することが困難なもの並びに本事業を実施するための調査費その他の本事業を実施するために必要な経費
	評価関連経費		本事業に関する社会的インパクト評価等に係る調査、検証及び評価等の実施に必要な経費

各目的区分の助成上限

本事業では、目的区分毎に助成額の上限を定めています（表4）。詳細は積算の手引きを参照してください。

表4：各目的区分の助成上限

団体	目的区分		助成上限に関する規定
実行団体	事業費	直接事業費	事業費の助成額の85%以上
		管理的経費	事業費の助成額の15%以下
	評価関連経費		事業費の助成額の5.0%以下

2. 資金管理に関する業務

2-1. 業務概要

本事業の資金管理に関する業務として、以下の事項に対応することが求められます。

■ 精算手続き

指定口座の入出金の管理は各団体が行いますが、その内容を月次等で報告することが求められています。実行団体の入出金の内容は資金分配団体が月次等で確認します。また年度毎に本事業の実績額を確定させます。事業完了時には助成期間合計での助成額を確定させ、概算払いした助成額との差額（残額）があれば返還します。

■ 助成金の支払い

JANPIAは、資金分配団体に助成金の概算払いを行い、資金分配団体は実行団体に助成金の概算払いを行います。概算払いされる助成金は、毎年、JANPIAが預金保険機構に予算申請をして確保します。

■ 区分経理

各団体は、本事業に係る損益が明確になるよう区分経理を行うとともに、区分経理に関する会計書類を作成して、各団体の本店または主たる事務所に、会計帳簿と共に備え付けてください。複数の休眠預金事業を行っている場合、採択事業毎に区分経理を行います。

■ 外部監査

各団体において、本事業に係る決算書類について内部監査または外部監査を実施してください。可能であれば外部監査を受けることを推奨します。なお、本事業の外部監査に係る経費については、管理的経費に含めていただいてもかまいません。

2-2. 精算手続き

経費精算報告書

精算手続きでは経費精算報告書を提出します。経費精算報告書は、以下の書類（表5）で構成されます。

表5：経費精算報告書の構成

書類	様式有無	概要
経費精算報告書の表紙	あり	事業完了時に使用する精算結果の報告書類。
様式1 総括表		本事業の精算結果およびその計算過程を記載。
様式2 支出明細書		利用任意（様式5・6で代用可）。目的区別に支出明細を集約し、支払証拠書類との対応に要する番号を記載。
様式3 経費集計表		会計科目別に資金計画（予算）に対する実績額を記載。
様式4 支払証拠書類貼付台帳		任意利用。利用しない場合は支払証拠書類に直接付番。
様式5 収支管理簿		指定口座における入出金明細の記録簿。
様式6 現金出納帳		指定口座から現金支出をした場合に使用する記録簿。
添付書類1 指定口座の通帳の写し	なし	指定口座の通帳の写し。
添付書類2 人件費に対する賃金台帳等の写し		人件費を計上する場合に必要な支払証拠書類の写し。

支払証拠書類

支払証拠書類の要件として、①日付、②宛名（各団体名）、③発行者（支払先）、④支払内容（購入物品名、単価、数量、支払金額等）が明記されている必要があります。基本的には「領収書」を支払証拠書類としますが、前述の①から④が明記されていない場合は、それらが記載されている請求書等と合わせて支払証拠書類とします。ただし現金による支払いの場合は、指定口座の通帳から支払先に支払われた事実が確認できないため、支払先による受領印または受領者サインも支払証拠書類に明記されている必要があります。なお、法人口座を経由して支払ったため支払先に支払われた事実が確認できない場合には、別途、法人口座の振込記録等を確認する場合があります。

業務委託費の支払証拠書類に実施業務の明細が記載されていない場合は照会することがあります。

近距離移動の交通費は、利用日、利用目的、利用区間、利用交通機関、利用者名、支払金額が明記され、利用者の署名捺印のある支払証明書等を支払証拠書類とできます。新幹線や飛行機の長距離移動は領収書の添付が必要です。飛行機の場合、航空券の半券もしくは搭乗券、または搭乗証明書も添付してください。出張で宿泊した場合、支払証拠書類に加えて宿泊先が発行する宿泊証明書を添付してください。

（航空券の半券、宿泊証明書等の添付は2022年4月以降の支出分から適用）

支払証拠書類の記載が読み取れない場合や修正されていると判断される場合は、精算の対象としません。レシートや航空券の半券等が感熱紙の場合、時の経過に伴い印字が読みづらくなっていますので、原本を適切に保管するとともに早めにPDFに電子化する等の対応をお勧めします。



飛行機の利用や宿泊の場合になぜ証明書類が必要？

オンライン予約の普及により、オンラインで領収書発行後にキャンセルできる環境にあるためです。実際に利用されたことを確認するため、上記の証明書類の提出をお願いしています。



管理的経費の支払証拠書類の取り扱い

管理的経費にかかる支払証拠書類は、各団体において保管する必要がありますが、精算手続きの一環として提出は必須としていません。ただし、資金分配団体の裁量により、管理的経費であっても実行団体に支払証拠書類の提出を求めることがあります。

また契約に則り、事業完了日の属する事業年度の終了後5年間は適切に保管してください。

よくあるご質問

Q. 領収書の発行が省略される場合はどうすればよいか？

A. 契約書もしくは請求書のどちらか一方、および金融機関の振込記録（通帳の写し可）で代替可能です。ただし、契約書もしくは請求書には、前述の②③④が明記されている必要があります。

Q. レシートは支払証拠書類となるか？

A. 支払証拠書類は原則として領収書です。領収書が発行できずレシートとなる場合は、団体の正式名称を記入して提出してください。レシートには前述の①②③④が明記されている必要があります。

Q. 自団体の規程では宿泊費は定額の支払いとなるため、同じ額で精算できないか？

A. 本事業では実費での精算となります。各団体から個人に対して定額で支払う場合でも、本事業の助成対象は実費となりますので、実費の支払証拠書類を取得してください。

Q. 携帯電話代について、個人別の料金明細はあるが処理が煩雑になるので自団体の平均額を計上してよいか？

A. 本事業では実費での精算となりますので平均額での計上はできません。按分など見積りでの計上が認められるのは本事業に係る実費が確認できない場合に限ります。

Q. 支払証拠書類は原則として領収書であるが、自団体の経理規程では、例えば宿泊代、会議における飲食代、旅費は領収書は不要としている。このように精算の手引きと自団体の経理規程の内容が異なる場合、どのような対応が求められるか？

A. 本事業の精算手続きでは、各団体の経理規程の内容によらず、原則として精算の手引きに則った対応をお願いします。

精算添付書類

■ 添付書類1 指定口座の通帳の写し

原則は通帳の写しですが、以下の要件を共に満たす場合は、代替物としてインターネットバンキングの入出金明細での提出を可能とします。

1. 加工ができないファイル形式であること

金融機関によっては入出金明細をデータ加工が可能な CSV ファイル等で出力できる場合があります。その場合は画面コピーや PDF 等によりデータ加工ができない出力方法を選択してください。

2. 通帳に印字される内容が記載されていること

通帳に印字される内容が記載されない入出金明細（残高表示がない、振込のみが記載され現金出金が記載されない等）は、代替物として利用できません。

■ 添付書類2 人件費に対する賃金台帳等の写し

実行団体は人件費を計上する場合に提出を必須とされています。給与支払の事実および支払額の適切性を確認するため、以下のいずれかの書類の写しを提出してください。

- ・ 「賃金台帳」
- ・ 「給与振込明細書」 および「給与額の根拠資料（勤務実績表等）」



賞与の取り扱い

賞与は、就業規則や雇用契約において支給額や支給条件が明確に定められている賃金としての賞与は助成対象となります。会社業績や別事業の業績により発生する業績連動型の賞与は助成対象とはなりません。



管理的経費の精算添付書類の取り扱い

管理的経費にかかる精算添付書類は、各団体において保管する必要がありますが、精算手続きの一環として提出は必須といたしません。ただし、資金分配団体の裁量により、管理的経費であっても実行団体に支払証拠書類の提出を求めることがあります。

また契約に則り、事業完了日の属する事業年度の終了後5年間は適切に保管してください。

他事業と按分している場合の支払証拠書類について

➢ 人件費

「添付書類2 人件費に対する賃金台帳等の写し」に加え、按分の計算方法・数値を添付書類2などに記載したうえで、その根拠の写しを添付してください。例えば勤務時間で按分している場合は勤務管理表などです。

➢ 人件費以外の経費

当該経費の支払証拠書類に加え、按分の計算方法・数値を支払証拠書類などに記載してください。例えば面積割であれば、何畳あるうちの何畳を本事業で使うかなどです。その根拠の写し（図面など）の提出は原則として求めていません。

よくあるご質問

Q. 同一人物の人件費を複数の目的区分（直接事業費と管理的経費と評価関連経費等）に計上することは可能か？

A. 明確に業務の切り分けがなされ、説明可能な場合に限り可能です。その場合「添付書類2 人件費に対する賃金台帳等の写し」に加えて、目的区分毎の人件費の計算方法・数値を添付書類2などに記載したうえで、その根拠となる勤務管理表などを提出してください。

精算手続き

精算手続きは、「月次の精算報告」「年度末の精算報告」「事業完了時の精算」の3つに分類されます。

■ 月次の精算報告

<必要書類の提出>

各団体は、以下の経費精算報告書（表6の「月次等」に●がある書類）を提出します。提出する頻度は、資金分配団体の裁量により月次から四半期の間で決めてください。

<提出書類の確認>

資金分配団体は、実行団体から提出された書類に基づき、支出内容が適切であるか、支払証拠書類が要件を満たしているか、経費精算報告書の記載と支払証拠書類が整合しているか等を確認します。

助成対象として認められない支出があった場合は、実行団体に対して指定口座に戻し入れるように指示します。実行団体は、戻し入れた日付で収支管理簿にその内容を記載してください。



収支管理簿等の確認ポイント

収支管理簿および現金出納帳は、確定助成額を決めるうえで元データとなる重要な書類です。以下の事項は必ず確認します。

- ・収支管理簿の残高が「指定口座の通帳の写し」と一致しているか
- ・収支管理簿および現金出納帳の内容が「資金計画」に則っているか

（金額が同水準か、目的区分や会計科目が一致しているか、不明瞭な支出がないか等）

新たな運用に関する例外対応について

上記運用は、2022年4月から新たに適用される手続きとなります。本手引きが適用される各団体は、資金分配団体の裁量により、新たに適用される手続きではなく、従来適用されていた手続き（支払証拠書類の提出・確認は年度末精算等でまとめて実施）を継続することもできます。各事業に応じて異なりますので、資金分配団体に確認の上ご対応ください。

■ 年度末の精算報告

<必要書類の提出>

各団体は、以下の経費精算報告書（表6の「年度末」に●がある書類）を提出します。月次の精算報告で既に提出している書類は、再度提出する必要はありません。

実行団体は、資金分配団体が定める期限まで（4月中を目途）に資金分配団体に必要書類を提出します。資金分配団体は、4月末までにJANPIAに必要書類を提出してください。

<提出書類の確認>

年度末の精算報告では、月次の精算報告と同様の確認を漏れなく行い、助成対象とする実績額を確定させます。月次の精算報告で確認していれば再確認は不要ですが、未提出部分について確認してください。また経費精算報告書を用いて、年度別の実績額や会計科目別の予算の消化率を確認します。

■ 事業完了時の精算

<必要書類の提出>

各団体は、以下の経費精算報告書（表6の「事業完了」に●がある書類）を提出します。月次や年度末の精算報告で既に提出している書類は、再度提出する必要はありません。

実行団体は、資金分配団体が定める期限まで（実行団体の事業完了日から1ヶ月以内を目途）に資金分配団体に必要書類を提出します。資金分配団体は、内容を確認して実行団体の精算金額（残額）を確定させたうえで、資金分配団体の事業完了日から2ヶ月以内にJANPIAに必要書類を提出してください。

<提出書類の確認>

事業完了時の精算では、年度末の精算報告までの手続きを全て完了したうえで、助成期間合計での助成額を確定させて（以下「確定助成額」という）概算払いした助成金と確定助成額との差額である精算金額（残額）を確定させます。もし会計科目別の予算の消化率を確認する中で、人件費が資金計画を超過しているといった科目間流用の規定（「1-4. 予算執行の柔軟性」参照）に抵触する支出がある場合は、原則として超過分は助成対象から除外します。

<残額の返還>

実行団体は、精算金額（残額）を資金分配団体に返還します。資金分配団体は実行団体に対して請求書を発行し、実行団体は請求書記載の期日までに返還してください。

表6：精算手続きにおける提出書類

書類	実行団体→資金分配団体		
	月次等	年度末	事業完了
経費精算報告書の表紙	-	-	原則廃止。 ただし実行団体の代わりに資金分配団体が助成システムの申請を行う場合は作成要(押印不要)
様式1	総括表	-	●
様式2	支出明細書	● (任意)	●
様式3	経費集計表	-	●
様式4	支払証拠書類貼付台帳	● (任意)	●
様式5	収支管理簿	●	●
様式6	現金出納帳	●	●
添付書類1	指定口座の通帳の写し	●	●
添付書類2	人件費に対する賃金台帳等の写し	● (任意)	●

- ・ 様式6現金出納帳
指定口座からの現金の引き出しがない場合は提出不要です。
- ・ 支払証拠書類および添付書類2 人件費に対する賃金台帳等の写し
管理的経費以外の目的区分に計上した費用について提出を必須としています。

助成額の確定（実行団体）

確定助成額は、目的区分である「直接事業費」「管理的経費」「評価関連経費」毎に計算した助成額を合算した額です。計算方法は以下のとおりです。

■ 「直接事業費」「管理的経費」

精算手続きにおいて助成対象と認められた実績額が資金計画を超過した場合、資金計画の助成額を確定助成額とします。実績額が資金計画以下の場合、実績額を資金計画で除した値（執行率）に資金計画の助成額を乗じた金額を確定助成額とします。

「直接事業費」「管理的経費」の計算イメージ

資金計画が100、実績額が90の場合



■ 「評価関連経費」

資金計画の助成額または精算手続きにおいて助成対象と認められた実績額のどちらか少ない金額を確定助成額とします。

よくあるご質問

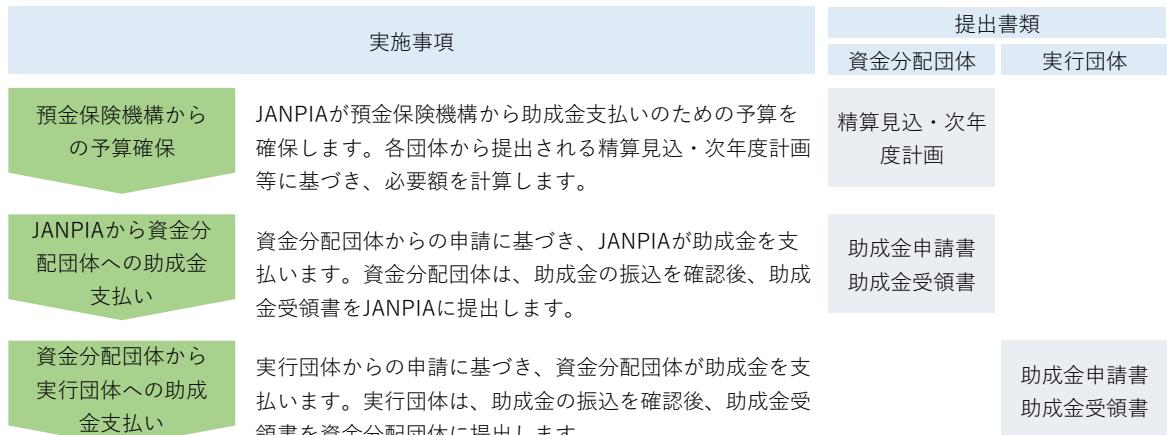
Q. 実行団体について、直接事業費を当初の資金計画よりも減額したために事業費が縮小した場合、助成上限に関する規定に基づき管理的経費および評価関連経費も減額する必要があるか？

A. 事業費が縮小した場合に資金計画の管理的経費および評価関連経費を各々の上限規定にあわせて減額するかは、資金分配団体の裁量により決めてください。基本的には減額しなくともかまいませんが、大幅な計画変更により事業規模が縮小した場合は、資金計画における管理的経費および評価関連経費を減額することを検討してください。

2-3. 助成金の支払い

助成金支払いに係る業務の流れおよび実施時期は以下のとおりです。

■ 業務の流れ



■ 実施時期（2022年度以降）

<精算見込・次年度計画>

2020年度通常枠の資金分配団体は、各実行団体の状況を踏まえて2022年12月に精算見込・次年度計画をJANPIAに提出します。

<助成金支払い>

各団体は、原則として以下のとおり（表7）助成金を申請します。資金分配団体はJANPIAからの助成金振込を受けて実行団体に助成金を支払いますので、実行団体は資金分配団体の案内を踏まえて助成金を申請してください。

表7：助成金の申請時期および申請額

申請団体 (申請先)	申請時期		対象期間	申請額
実行団体 (資金分配団体)	2022年度 以降	4月	4月から6月分 (3ヶ月分)	当該年度の助成金支払い予定額の25% (千円未満切り捨て)
		7月	7月から9月分 (3ヶ月分)	当該年度の助成金支払い予定額の25% (千円未満切り捨て)
		10月	10月から翌年3月分 (6ヶ月分)	当該年度の助成金支払い予定額の残額

2-4. 区分経理

各団体は、以下のとおり（表8）区分経理に関する会計書類を作成のうえ提出します。区分経理に関する会計書類とは、区分経理が確認できる決算書類または会計帳簿を指します。複数の休眠預金事業を行っている場合、採択事業毎に区分経理を行うとともに、区分経理に関する会計書類の中で区分表示させます。

表8：区分経理に関する会計書類の提出

提出物	区分経理が確認できる「①決算書類」「②会計帳簿」のいずれか一方を提出してください。
①決算書類	公益法人会計の場合は正味財産増減計算書内訳表、NPO 法人会計基準の場合は活動計算書、企業会計基準を適用する団体の場合は損益計算書
②会計帳簿	合計残高試算表や元帳など、他の事業と区分され記帳されている会計帳簿であり、本事業の収支状況等が確認できる書類 ※休眠預金事業の区分が明確にされていれば、他事業の記載は不要
提出時期	原則として書類の準備が出来次第、速やかに提出してください。各実行団体の区分経理に関する会計書類の提出時期は、資金分配団体の裁量により決定します。
対象期間	本事業の助成期間が含まれていることが要件です。助成期間が複数会計年度に跨る場合でも、全ての助成期間にかかる会計書類の提出は不要です。

※2019年度通常枠の各団体について、2021年3月に実施した年度末精算で提出済みの場合は、再度提出いただく必要はありません。

「①決算書類」イメージ

正味財産増減計算書内訳表 (円)						
科目	公益目的事業会計				法人会計	合計
	○○事業	休眠預金 A事業	休眠預金 B事業	小計		
I 一般正味財産増減の部						
1. 経常増減の部						
(1) 経常収益 受取助成金 ○○○ 受取寄付金 ○○○						
事業収益 ○○○						
雑収益 ○○○						
経常収益計						
(2) 経常費用 事業費 ○○○ 管理費 ○○○						
II 指定正味財産増減の部						
○○○						
III 正味財産期末残高						

※ 「①決算書類」は公表資料に準ずる形で作成されれば、公表資料でなくても構いません。「①決算書類」において採択事業毎の区分表示が難しい場合は「②会計帳簿」を提出してください。

本事業と他の事業を区分して表示します。
複数の休眠預金事業を行っている場合、採択事業毎に表示します。

本事業の総事業費にかかる費用を区分して記載してください。

3. 対象経費

助成の対象となるのは、契約第7条にある助成対象経費のうち助成期間内の活動に要する経費として当該期間中に支払った本事業の実施に係る経費です。ただし、前払家賃や翌月払いの入会費等助成期間内の活動に要するものであれば、助成期間開始前または助成期間終了後に支払う経費も助成の対象となります。また、助成期間終了後に支払う場合は、事業完了時の精算完了前に支払う必要があります。

また、以下のいずれかに該当する経費（表9）は助成の対象外となりますのでご留意ください。これらに該当しない経費であっても、事業目的に沿わない場合は助成の対象外となる場合があります。

表9：対象外経費

対象外経費	主な該当事例
本事業に直接必要ではない経費	<ul style="list-style-type: none">個人または団体に贈与される寄付金、義援金および贈呈品等会議費等におけるアルコール類の購入費用勤務時間外の飲食代^{*2}退職金共済の掛け金業績連動型の賞与^{*3}自団体の役員としての役務提供に係る費用^{*4}
経済合理性を欠く経費	<ul style="list-style-type: none">ファーストクラス、スーパーシート、プレミアムエコノミー、グリーン車などの特別料金会議費の範囲を逸脱し、社会通念上、接待交際費に当たるもの合理的な理由がない、一般的な相場よりも過度に高額な物品の購入
別の用途で使われる可能性のある経費	<ul style="list-style-type: none">現金の給付金券類の配付
本事業後に返金される経費	<ul style="list-style-type: none">金券類の購入による預入（交通系ICカード等）賃貸契約時に支払う敷金・保証金

*2 朝および夕方以降の時間帯でも、本事業の勤務時間中であり、勤務の一環として飲食した場合は助成対象とできます。
出張時の朝食も例外ではありません。

*3 就業規則や雇用契約において支給額や支給条件が明確に定められている賃金としての賞与は助成対象とできます。

*4 役員であっても自団体の役員としての役務提供と明確に区分できる本事業の伴走支援等に係る費用は助成対象とできます。



ポイントなどが付く場合は？

割引券やクレジットカード等のポイント、キャッシュバック特典については、原則として受け取りを辞退してください。辞退できない場合には、休眠預金事業に活用ください。

よくあるご質問

Q. 本事業で電化製品など長期間にわたって利用を見込んでいる什器備品を購入するが、全額を助成対象とできるか？

A. 経済合理性があり資金計画で合意されていることが前提となります。契約に定める（財産の処分の制限）を遵守いただくことを条件に、助成期間終了後の活動に使用する場合でも、全額助成の対象とすることができます。

Q. 助成期間前に購入した什器備品があり、本事業のために利用したい。助成期間内の活動に要する経費として休眠預金事業で負担することはできるか？

A. 本事業の精算はキャッシュベースで行うことから、助成期間開始前に支払いが完了しているものは原則として助成対象経費とはなりません。

4. コンソーシアム

1つの事業において、運営上の意思決定および実施を2団体以上で共同して行う共同事業体のことを、コンソーシアムと言います。コンソーシアムの場合には、各団体の担当事業や担当役割を定めた、コンソーシアム協定書を締結します。この章ではコンソーシアムの場合に必要となる手続きを記載します。こちらに記載の無いことは、前章までに記載した通常の各団体の取り扱いと同じとなります。

4-1. コンソーシアムにかかる用語

コンソーシアムを組成する全ての団体を「コンソーシアム構成団体」と総称し、「コンソーシアム構成団体」の中で、その役割に応じて「幹事団体」「構成団体」に分かれます。

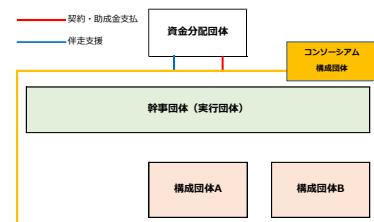
4-2. コンソーシアムモデル

実行団体のモデル

■ 単独型

(コンソーシアム構成団体：幹事団体 + 構成団体)

幹事団体は実行団体として資金分配団体と資金提供契約を締結します。幹事団体はコンソーシアムの統括を担います。構成団体は、幹事団体に協力して事業を推進します。



4-3. 「コンソーシアム構成団体」の業務

「コンソーシアム構成団体」は、その役割に応じて資金管理に関する業務（表10の●がある業務）を行います。

表10：「コンソーシアム構成団体」ごとの業務

本手引き	業務	幹事団体	構成団体
—	資金提供契約の締結	契約当事者	—
資金管理の基本			
1-1	指定口座による資金管理（指定口座の開設）	●	—
1-2	指定口座からの支払い	●	—
1-3	入出金の記録と支払証拠書類	●	—
資金管理に関する業務			
2-2	精算手続き	●	—
2-4	区分経理	●	—



「構成団体」は助成金を管理しません。そのため、指定口座の開設や資金管理に関する業務は不要です。

■ 「コンソーシアム構成団体」の提出書類

幹事団体場合、通常の実行団体と提出書類は同じです。構成団体は原則として書類の提出は不要ですが、支払い証拠書類の取得は必要です。精算の手引き「4-4. 構成団体の支払証拠書類」に則りご対応ください。

表11：「コンソーシアム構成団体」の作成書類

書類	幹事団体	構成団体
資金計画	・ 自団体分	• 原則不要 ※支払証拠書類は取得要
経費精算報告書		
区分経理に関する会計書類		

※作成書類について

「自団体分」と記載の書類は、前章までに記載した通常の各団体の取り扱いと同じとなります。

よくあるご質問

- Q. 各目的区分の助成上限の規定（管理的経費であれば事業費の助成額の15%以下等）は、団体毎に適用する必要があるか？
- A. 団体毎に適用する必要はなく、コンソーシアム全体での適用となります。コンソーシアム全体で超えない範囲で、団体間でご調整ください。ただし、「コンソーシアム構成団体」間で流用（資金計画上で予算が不足している団体分を他の団体分で補うこと）が発生する場合、資金計画の変更が必要です。
- Q. 管理的経費の支払証拠書類（5年保管）は誰が保管しておくべきか？
- A. 幹事団体で構成団体分も含めて保管をお願いします。保管期間後の処分等については、「コンソーシアム構成団体」間で協議してください。
- Q. 事業期間終了をもってコンソーシアムは解散するが、取得した財産等は誰の所有物になるか？
- A. 幹事団体の所有物となります。その後、構成団体等に譲渡する場合には、資金提供契約書に定める財産の処分の制限に則ったお手続きをお願いします。
- Q. 5月に構成団体が物品購入のため立て替えて支払ったこと（領収書は5月の日付）に対して、幹事団体から構成団体には7月に精算を行った。この場合、経費精算報告書「様式3 収支管理簿」に記載する日付は？
- A. 収支管理簿には、幹事団体から構成団体に支払った日付（7月）で記載をしてください。
- Q. 構成団体に運営資金として一定額を仮払い（前払い）することは可能か？
- A. 構成団体が資金管理する契約にはなっていないため、仮払い（前払い）は不可です。

4-4. 構成団体の支払証拠書類

■ 支払証拠書類の要件

コンソーシアムを組成して事業を実施する場合、構成団体であっても精算の手引き「2-2.精算手続き」の「支払証拠書類」で定める要件を満たした支払証拠書類（領収書等）を準備する必要があります。構成団体も実行団体の位置づけとなりますので、当該領収書等を含めて幹事団体への提出が必要です。

■ 支払証拠書類（領収書等）の宛名

コンソーシアムを組成し、構成団体が経費を支出する場合、基本的には構成団体の支払いは幹事団体に代わって立て替えていることになりますので、支払先から取得する領収書等の宛名は幹事団体としてください。なお、個別の事情により宛名が構成団体名等となっている場合でも、本事業との関係性が明確であり、本事業実施のために支出されたものであることが確認できれば、例外的に精算の対象とします。

表12：宛名の具体例

	宛名	備考
原則	幹事団体名	
例外	構成団体名 + 本事業名	構成団体名の場合、事業名やコンソーシアム名を追記することで本事業が一意に特定できる場合には例外的に許容し、精算対象とする。
	構成団体名 + コンソーシアム名	
	本事業名	事業名やコンソーシアム名が他事業では使用されておらず、本事業が一意に特定できる場合には例外的に許容し、精算対象とする。
	コンソーシアム名	

よくあるご質問

Q. 実行団体でコンソーシアムを組成しており、協定書に基づき幹事団体が構成団体に人件費に相当する費用を支払う場合、幹事団体が資金分配団体に提出する支払証拠書類は構成団体が発行する領収書だけでよい？

A. 支払証拠書類（領収書等）に加えて請求金額の根拠資料（所要工数等）を提出してください。

参考

経費精算報告書の記載方法（実行団体）

注意：経費精算報告書のエクセルファイルは、全事業期間を通して集計されるよう計算式が組まれています。本エクセルファイルを年度ごとに分けたり、収支管理簿や現金出納帳のシートを年度ごとに分けて管理されないようお願ひいたします。

表紙

新助成システムではワークフローで申請履歴が確認できることを踏まえ、「表紙」の作成は不要とします。ただし実行団体の事業完了時精算報告において資金分配団体が助成システムへの代理申請をする場合、実行団体は表紙の作成が必要です。表紙への押印は不要です。

(西暦) 年月日

(団体名)
(代表者役職名)
(氏名)

登録上の正式な団体名、役職・代表者名を記入してください。

登録印の押印は不要です。

最初に資金提供契約を締結した日付を記入してください。

事業名を記入してください。複数事業採択されている場合、該当の事業が分かるように記載してください。

資金提供契約日	
事業名	
助成金受領額	0円
精算金額	0円

添付書類：

(1) 精算様式1	総括表
(2) 精算様式2	支出明細書
(3) 精算様式3	経費集計表
(4) 精算様式4	支払証拠書類貼付台紙
(5) 精算様式5	収支管理簿
(6) 精算様式6	現金出納帳
(7) 精算添付書類1	指定口座の通帳の写し
(8) 精算添付書類2	人件費に対する賃金台帳等の写し

精算様式1 総括表

精算様式 1. 総括表

集計

	①助成額	②確定助成額	①-②残額 (精算金額)
2019年度		A	
2020年度			
2021年度			
2022年度		0	
合計	0	0	0

■ : 入力が必要なセル

□ : 入力が不要なセル（自動計算）

A 2019年度および2020年度の確定助成額には、2020年度の年度末精算で確定済みの値を記載します。

助成期間中に受領した助成金の合計額を入力してください。

総事業費 内訳

		直接事業費		管理的経費		評価関連経費	小計
		助成金	自己資金	助成金	自己資金		
2019年度	実績額	0		0		0	0
2020年度	実績額	0		0		0	0
2021年度	資金計画 (事業完了時点)	B					0
	実績額	0		0		0	0
2022年度	資金計画 (事業完了時点)	B					0
	実績額	0		0			0
2021年度～ 2022年度合計	資金計画 (事業完了時点)	0	0	0			0
	実績額	0		0		0	0
	執行率					-	-
	確定助成額					0	0

B 事業完了時点の資金計画
値を記入してください。

2020年度までは助成額が確定済のため、事業完了時に、2021年度から2022年度分を合計して当該2年分の確定助成額を計算します。

精算様式2 支出明細書（利用任意）

精算様式2. 支出明細書					
A. 直接事業費					
データ削除					
精算様式 4の番号	支出年月日 (西暦/月/日)	会計科目	支出先	実績額(円)	使途目的、理由など
A-1					
A-2					
A-3					
A-4					
A-5					
A-6					
A-7					
A-8					
A-9					
A-10					
A-11					
A-12					
合計				¥0	

支払証拠書類を提出する明細に対して番号を記入のうえ、支払証拠書類にも同じ番号を記載してください。

様式5（収支管理簿）および様式6（現金出納帳）から日付順でデータの転記が可能です。必要に応じご利用ください。
なお、転記を繰り返す場合には一度データを削除してから改めて転記ボタンを押下してください。データの並び順は変わりません。

表上のデータを全て削除する場合に押します。押した後、確実に全データが消えたことを確認してください。

※様式2B（評価関連経費）も同様に作業してください

※管理的経費の支出明細書について

管理的経費は支払証拠書類の提出を必須としていないため、様式がありません。資金分配団体から提出を求められた場合には、収支管理簿または現金出納帳の「支払証拠書類の番号」欄に付番するなど資金分配団体とともにご検討ください。

支払証拠書類への付番イメージ

例えば以下の支出の場合、様式2Aの「精算様式4（支払証拠書類貼付台帳）の番号」に数字を採番し、当該番号を支払証拠書類にも記入します。

精算様式2. 支出明細書					
A. 直接事業費					
精算様式 4の番号	支出年月日 (西暦/月/日)	会計科目	支出先	実績額(円)	使途目的、理由など
A-1	2021/10/10	委託費	○○会社	¥50,000	事業開始時(9月)の支援者向けアンケート調査

支払証拠書類と同じ番号を記入します。番号が分かれれば、記入方法は自由です。
(支払証拠書類に直接記入する、台紙に支払証拠書類を張り付けて台紙に記入する等)

領収書		収支管理簿/現金出納帳			
A-1 ●●財団 御中		支払証拠書類の番号 【様式2を利用しない場合】 A-1 A-1			
2021/10/10 (株)○○会社					
総合計額 50,000 円					
項目 支援者向けアンケート調査					

様式2を利用しない場合は、収支管理簿/現金出納帳の支払証拠書類の番号列をご利用ください。

精算様式3 経費集計表

精算様式3. 経費集計表

資金計画における会計科目を記入してください。

事業完了時点の資金計画における科目ごとの助成期間合計値を記入してください。
助成金に加えて、自己資金・民間資金を含めた値としてください。

* 会計科目が多い場合、他の行をコピーして行を増やしてお使いください。
(動計算)

目的区分	会計科目	資金計画値	実績額				消化率	科目間流用の理由等
			2019年度	2020年度	2021年度	2022年度		
直接事業費			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
	小計		0	0	0	0	0	
管理的経費			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
	小計		0	0	0	0	0	
評価関連経費			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
			0	0	0	0	0	
	小計		0	0	0	0	0	

科目間流用を行った場合、流用の状況や理由などの説明を記載してください。

※科目間流用とは、資金計画上の予算が不足している会計科目の支出増加分を予算が余る会計科目の支出減少分で補うことを指します。

精算様式5 収支管理簿

※複数経費をまとめて振込・振替する場合、明細毎に行を分けて記入したうえで、各明細に対する支払証拠書類を提出してください。同一の支払先であっても目的区分や会計科目が異なる場合は必ず明細を分けてください。

※「支払区分」「財務諸表における会計科目」への記入は任意となります。

※「精算様式6 現金出納帳」の記載方法は、収支管理簿の案内を参考にしてください。

精算様式5 収支管理簿

(1) 助成金・自己資金等を指定口座に入金した場合

助成金や自己資金は指定口座で管理する必要があるため、入金のあった日付で収支管理簿に収入として記録します。またこれら以外に、各団体が本事業の実施により得た利益は本事業実施のための自己資金に充当することが契約で定められていますので、指定口座に入金して管理してください。

該当半期	年月日	支出金額	収入金額	指定口座残高	支払区分	支払先/受入元	目的区分	財務諸表における科目	会計科目	使途・目的・理由など
2021下期	2021/10/5		3,000,000	3,000,000	振込	【資金分配団体名】	-	(団体による)	(団体による)	助成金入金
2021下期	2021/10/5		100,000	3,100,000	振込	【責任者名】	-	(団体による)	(団体による)	自己資金入金

目的区分の記載は不要です。

会計科目は、各団体において財務諸表作成目的で通常用いている科目を記載してください。

(2) 誤った支出の戻し入れがある場合

誤って支出した金額を指定口座に戻入のうえ、戻し入れた日付で収支管理簿にマイナスの支出として記録します。目的区分および会計科目は、当初支出時と同じ内容を記載します。

該当半期	年月日	支出金額	収入金額	指定口座残高	支払区分	支払先/受入元	目的区分	財務諸表における科目	会計科目	使途・目的・理由など
2022下期	2022/10/10	100,000		2,665,000	振込	法人口座	管理的経費	人件費	人件費	職員A ○月分給与（按分比率30%）
2022下期	2022/10/23	-25,000		2,690,000	振込	法人口座	管理的経費	人件費	人件費	職員A ○月分給与/按分計算修正のため金額訂正

収入ではなくマイナスの支出として記録します。

目的区分および会計科目は、当初支出時と同じ内容を記載します。

誤った支出の戻入であることが分かる説明書きを入れます。

(3) 本助成に関する費用を法人口座で支払う場合

各団体の法人口座から支払先口座への支払い後に、指定口座から法人口座に本事業の負担分を振り込みます。同月内に処理を行っていただくことを前提としますが、社会保険料等は、資金分配団体が合理的に説明できる方法であれば異なる対応でも構いません。

該当半期	年月日	支出金額	収入金額	指定口座残高	支払区分	支払先/受入元	目的区分	財務諸表における科目	会計科目	使途・目的・理由など
2022下期	2022/10/10	100,000		2,665,000	振込	法人口座	管理的経費	人件費	人件費	職員A ○月分給与（按分比率30%）

(4) 本助成に関する費用をクレジットカードで支払う場合

指定口座から引き落とされた日付で収支管理簿に記録します。複数の購入に対する支払いが一括で行われますが、収支管理簿にはその明細を記録してください。目的区分および会計科目が異なる支出は、必ず行を分けて記録してください。

引き落としは一括でも明細単位で記録します。

該当半期	年月日	支出金額	収入金額	指定口座残高	支払区分	支払先/受入元	目的区分	財務諸表における科目	会計科目	使途・目的・理由など
2024上期	2024/4/10	3,500		2,668,500	振込	○○カード社	管理的経費	消耗品費	消耗品費	文具類（3ヶ月分クレジットカード購入分）
2024上期	2024/4/10	14,000		2,672,500	振込	○○カード社	直接事業費	旅費交通費	旅費交通費	○○団体訪問（3/20）移動費用

3月購入分でも、引き落としがある4月の日付で支出内容を記録します。

精算様式5 収支管理簿

(5) 現金で支払う場合

指定口座からの現金の引き出しおよび戻し入れについて、収支管理簿および現金出納帳の各々に以下のとおり記録します。その際、支払先、目的区分および会計科目は「-」としてください。また現金による支払い内容は、現金出納帳に記録してください。

収支管理簿

該当半期	年月日	支出金額	収入金額	指定口座號	支払区分	支払先/受入元	目的区分	財務諸表における科目	会計科目	使途・目的・理由など
2021下期	2021/12/15	10,000			【任意】		-	-	-	現金引出（現金出納帳参照）
2021下期	2021/12/31		5,000	2,940,000	現金		-	-	-	現金戻入（現金出納帳参照）
				2,945,000						

現金の引出・戻入は、支払先、目的区分および会計科目を「-」としてください。

現金出納帳

該当半期	年月日	支出 (戻入)	収入 (引出額)	現金残高	支払区分	支払先	目的区分	財務諸表における科目	会計科目	使途・目的・理由など
2021下期	2021/12/15		10,000	10,000	【任意】	-	-	-	-	指定口座から引き出し
2021下期	2021/12/26	5,000		5,000	現金	郵便局	PO間連絡書	通信費	通信費	切手購入
2021下期	2021/12/31	5,000		0				-	-	指定口座への戻入

(6) 預り金が発生する場合

資金の動きと整合していく資金分配団体として合理的に説明できる方法で記録いただければ構いません。具体例として、3月30日に銀行振込で講師の口座に源泉徴収後の「謝金」8,979円を振り込み、預り源泉所得税を翌年度の4月10日に納税した場合の記録方法は以下のとおりです。

具体例 1

年度	年月日	支出金額	収入金額	支払先/受入元	目的区分	財務諸表における科目	会計科目	使途・目的・理由など	支払証拠書類の番号
2021	2022/3/30	8,979		○○氏	評価関連経費	謝金	謝金	3月15日登壇○○氏講師謝金	【様式2を利用しない場合】 20
2022	2022/4/10	1,021		○○税務署	評価関連経費	謝金	謝金	3月30日付○○氏講師謝金源泉徴収分預り金	21

具体例 2

年度	年月日	支出金額	収入金額	支払先/受入元	目的区分	財務諸表における科目	会計科目	使途・目的・理由など	支払証拠書類の番号
2021	2022/3/30	10,000		○○氏	評価関連経費	謝金	謝金	3月15日登壇○○氏講師謝金	【様式2を利用しない場合】 20
2021	2022/3/30		1,021	○○氏	-	預り金	預り金	3月30日付○○氏講師謝金源泉徴収分預り金	20
2022	2022/4/10	1,021		○○税務署	-	預り金	預り金	3月30日付○○氏講師謝金源泉徴収分預り金	21

費用の二重計上を防ぐため、4月10日の納付（預り金の記録）時には、目的区分を「-」としてください。

支払証拠書類を提出してください。
目的区分が「-」のためグレーアウトの表示になりますが無視してください。

更新履歴

バージョン	年月日	更新箇所	更新内容
1.0	2022年3月17日	-	初版公開
1.1	2022年12月13日	2-2. 精算手続き 参考:経費精算報告書の記載方法	新助成システムへの移行（2022年10月リリース）に伴う経費精算報告書「表紙」の取り扱い変更